

# 現の、街で。

江 弘毅

Q—今度、雑誌の特集でレストランをやるかと思ってるんだけど、あまり売れないんじゃないか、みたいな感じで言われてる。  
A—レストランって、フランス料理やらイタリア料理やらの。Q—そう。やっと「シヤス」や流行りやらで「フー」といっていったのが終わって、今、状況としてとても値打ちのある店は、食べられるようになった。あの時代はたっぶりワインやら料理やらの勉強もしたしね。何よりも時代がどうであれみんなでおいしいものを食べるのは楽しい。A—わかります。けど、今はもつ鍋の時代ですよ。日経トレンディが何かに載ってたけど、この数カ月で東京にもつ鍋専門が200軒以上出来たって。やっぱり安いのが一番だつて。Q—そりゃ当然そうです。安く言われて腹ふくれる。でも、もつ鍋はもつ鍋だし、てっちりもつ鍋の楽しみを一緒にすることはないと思う。それが一番のポイントですよ。リッチな気分とか他人よりも俺はレベルが高い、とかじゃなくて。結局、フランス料理「キタマ」がでかい、それでキタマがでかいのが、もう恥ずかしい、みたいな時代ですよ。今は、でも力がないなりに、本当はきつとある

んだけど、みんなできつかりしたメシを楽しく食べたい、という切実な欲求は、とくに今の時代にあるんじゃない。  
A—政治やら経済やら、自分の財布やらもひびくくるので、何かこう暗いというか。だから、食べることぐらいはしっかりと楽しみたい。それは分かる。でも気分がそうならない。  
Q—それだったらテイラミスと同じじゃない。流行りすたりの中でしか何も消費されない。ファッションの世界でなら、よく分かるんだけど、イタリア料理にしたって、やっぱり本質は楽しく食べられるモノや方法論にあると思う。確かにイタリア料理のシェフになるのがお洒落みたいなのはあったけれど。  
A—そんなこと言ってるんじゃないよ。外へ出て派手に食べるのが今はやってられないというか、何かひびくかかってしまう。Q—そしたらもつ鍋はどつなの。A—決定的に安いじゃない。1人3,000円はOK。  
Q—何を言ってるんだ、安けりやいい、みたいなことも意味がないよ。全部嘘だよ。ただ単純にブームだけ。結局、みんなが金持みたいなの数年前の申し消費とは何ら変わらない。それを高いと思うか、安いと思うかというのをみんな考え出したんじゃないの。だから服で言ったらギャップじゃないの。現在のところ。  
A—でも安いにこしたことはない、という真実はあります。

Q—そんなあたりまえのこと主張してたらダメだよ。結局、高度成長の頃とおんなじ指向性だよ。カネやら冷蔵庫やらテレビやら、持ちました。それから90年代になって、海外旅行行きました。ブランド品の服も買いました。それがどうなの、やっぱり貧しいままじゃない。  
A—貧しくなんてないよ。いっぱいもって、便利なのは事実なんだから。だから今、安いもの本当に意味のあるものに注目している。Q—違う。そもそもいっぱい持つてる、ということ自体、何にもならないということだ。生活すること、街で生きていくことを楽しむというのとは、いっぱい持つ、ということとは違うですよ。いっぱい持つ、というのはやっぱり楽しいことだと思っけだよ。それと違うのは、主体の問題だよ。ベルサーチ着たて誰か「格好いい」と言ってくれたら悲しいでしょ。持っていることと食べたりに楽しむこと、すなわち違うことは全く別の世界なんだよ。



# 珍獣総進撃

和泉 修



今回の吉本楽屋話は、ラジコなどをやっているときに一番多い質問、どついたら吉本興業に入れますか？これについて答えながら小ネタも交えて書いていきたいと思えます。まず入り方としては、大きく2通りに分かれます。ひとつは芸人さんの弟子になって修行する方法。もうひとつはNSC(吉本芸能学院)に入学して卒業してから入る方法。今一番多いのは、後者のNSCからです。この出身には第一期生でダウンタウン、トミーズ、ハイヒール。若手では、ベイブルース、トゥナイト、雨上がり決死隊、藤原、ハッパアロー吾郎など、たくさんいます。さてこのNSCでは、一年間何をやるかというと、学費を払って、週一回の発声、ダンス、漫才、コント、芝居の勉強をしますが、その一年間で、相方を見つけて漫才をするのか、一人でコントをするのか自分たちで決めなければなりません。今のNSCの状況も、入学時には200人くらいいるらしいのですが、卒業していくのは30名くらいで、世間に名前が出るくらいになるのは、毎年、5組くらいでしょう。したがってNSCに入れば、かならず吉本のタレントになれるというわけではないのです。そしてもうひとつの、弟子になる方法ですが、確率でいけばこちらの方が高いでしょう。しかしはっきり言って、キツイです。NSCは授業という形で、いろんなことを勉強できますが、弟子は、自分で師匠に付きながら、勉強していかなければなりません。それに、礼儀は師匠からうるさく言われ、カバンや衣装も持たなくてはいいけないし、お茶をだしたり出勤をとりに行ったり、肉体的には重労働です。ましてそれを2年間ですからたいへんです。しかし利点もたくさんあります。まず他の芸人さんに顔を覚えられ、かわいがってもらえます。それに師匠と実際にいるんな所に行くので、テレビ局やラジオ局の人にもかわいがられます。そして毎日、師匠から昼メシ代として、千円ももらえるわけですから、食いつぶさることはないでしょう。クビにさえないなら、ベテランの芸人さんは、みんなこの方法で吉本に入っています。そして不思議なことに、師匠が落語家なら弟子も落語家、というわけではないのです。漫才師の師匠はみんな漫才師かという、これも違います。たとえばオール巨人さん。巨人さんの師匠は、なんと新喜劇の岡八郎さんです。きびのどんごは、師匠が八万さんなのに漫才をやっ

ているし、何が自分の道かを選ぶのは自由なのです。弟子出身の若手といえばシミ、大西さん、おかげな、ゆうたさんなどがそうです。そして今、第3の入り方が増えています。それはオーディションという形です。僕が梅田花月シアターでやったミュージカルも他のメンバーは、オーディションで選ばれた人たちだし、圭修も、二丁目劇場の素人オーディション番組からの出身です、他にまるむし、非常階段、ぜんじろうなどいます。こつこつ考えると入る方法はたくさんあるし、簡単に入れます。しかし入ってからが勝負で、入ることだけで満足した人で活躍した人は一人もいません。そこを、今、吉本に入りたいと思ってる人はよく考えて下さい。今回はマジに書いてしまいました。来月からまたおもしろい話を書くから期待してネー

プロフィール 本名・釘田修吉 1966年生まれ。同志社大学文学部卒。吉本興業所属。1995年5月、漫才コンビ圭修としてデビュー。今所属新人漫才コンビ「俊賢、上方お笑い本舗」のリーダー。花王名人大賞新人賞受賞等、受賞多数。学生時代にバクシングで活躍し、高校フェザー級チャンピオン(昭和65年)に輝く。また、カバタイ第一回社会人大会優勝。トシボルは関西一と賞賛する。通称「吉本のスポーツ」が、現在は、ラジオ「Tのパーソナリティ」、レポーター、司会等、ソロでも活躍中。喋って、踊って、ギャグれる、プロボクサーである。